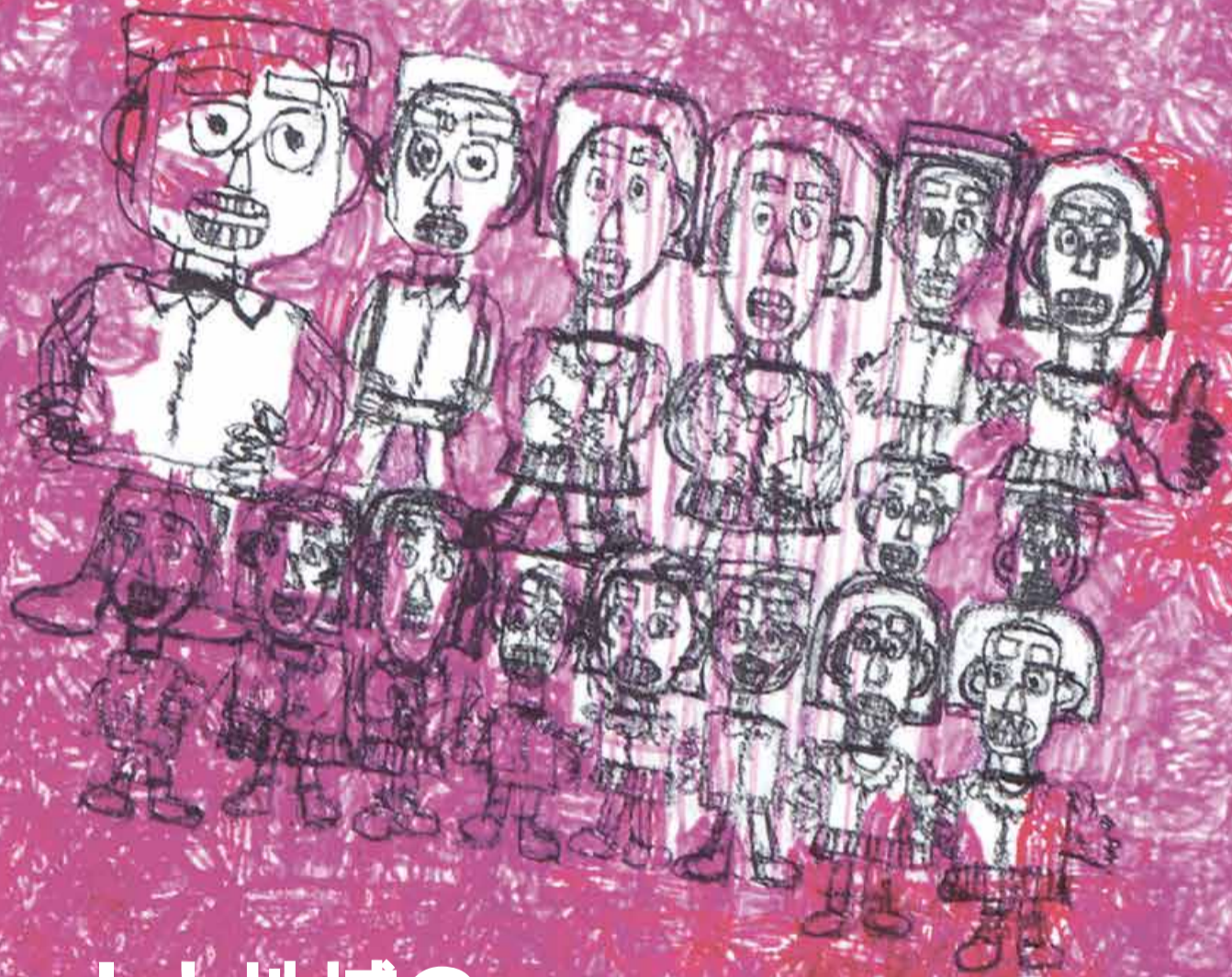


DIVERSITY IN THE ARTS PAPER

ダイバーシティ
イン・アーツ
ペーパー



07



FEATURE

02 | アートと地域のかかわり合い

たけし文化センター・ふくろうの森ビル
リベルテ・袋田病院

12 | ART GALLERY

栗原勝之・姫野暁
丈六萌寧・彌園哲志

18 | INTERVIEW

エドワード M. ゴメズ
ニコラ・フィリベール
奥村奈央子

22 | イッセー尾形の 妄ソー芸術鑑賞

浜松の繁華街に拠点を構える〈たけし文化センター〉のお散歩タイム。
積極的に街へとでていき、自分たちの存在を顕在化している。

文・岡田カイヤ (P4~5) 写真・衛藤キヨコ (P2~5)

様々な人が関わり合いを持つ中、アートは生まれます。日本全国にアーティストと関わり合いを持つことができる場所が次々と誕生しています。今回は静岡県浜松市〈たけし文化センター連尺町〉、大分県大分市〈ふくろうの森ビル〉、長野県上田市〈リベルテ〉、茨城県大子町〈袋田病院〉を訪ね、地域とアートの密接な関係を探ります。

アートと地域の関わり合い

街の音を鑑賞しながら散歩中

あるがままの混沌の中にある 「それぞれの特性や表現」を 個人のもつ文化として発信しながら、 街とつながっていく。



1

1.2 朝からキーボードのリズムトラックを聴き続けるナカムラジュンスケさんは、食事のときも、散歩のときもキーボードを手放さない。3 突発的に始まったダンスタイム。(たけし文化センター)では、なにかが突然始まるし、ふらりと遊びに来る人もいる。



2



3

01 静岡県 浜松市

たけし文化センター

すごいものを見てしまった。障害のある人、ない人かかわらず、ステージで音楽的なものを披露する雑多な音楽の祭典「スタ☆タン3」で。静岡県浜松市にある〈たけし文化センター連尺町〉で昨年11月に開催された「表現未満、」文化祭2019でのことだ。バンク、合唱、ラップ隊ほか、ただ舞台上で石を蹴るような動作をしては叫ぶだけの人も含む総勢14組のパフォーマンスは、次に起こることが予測不能だけに目が離せない。固唾を呑んで見守っていると、こうした雑多な表現がおもしろいこと、さらにはおもしろがっていいんだということを見出した。このイベントを主宰している(認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ)の活動は「表現未満、」がベースにある。「表現未満、」とは、その人を現す行為を、たとえ問題行動だとしても、とるに足らないことと一方的に判断せず、そこから対話や創造を生みだし、街へと顕在化させる文化活動だ。後日、〈たけし文化センター連尺町〉を訪ねると、彼らの日常生活自体が「表現未満、」の集積だった。

表現にまでいかない行為を、

どう楽しむかをひたすら考える

2018年に浜松の街なかへ拠点を移した〈たけし文化センター連尺町〉は、1~2階が福祉施設〈アルス・ノヴァ〉、3階がシェアハウス&ゲストハウスとして運営。3階ではレッツ代表の久保田翠さんの息子、社さんが、アーティストや大学院生と一緒に暮らしている。社さんには、重度の知的障害がある。そんな彼が福祉の枠組みを超えて社会の中でどのように生きていけるかの「実験」でもある。日課らしきものはなく、詩の制作に取り組む人、紙をちぎる人、キーボードのリズムトラックを聴く人、みんなが自由に過ごしている。突如ピアノの音とともにラジオ体操のようなダンスが始まり、拍手喝采がおこったかと思えば、ジャンプしながら奇声をあげる人もいるし、そんな雑然とした状況の中、散歩にも行かずに寝続けている人もいる。つまり、なんでもありのカオスの世界。それが心地

地いいし、おもしろい。

〈たけし文化センター〉は、久保田社という個人を全面的に肯定することが出発点となっている。社さんは、石ころをいれたタッパーを片手にもち、始終音を鳴らしている。食事中、他人の食器に手を入れる。それを問題行動と捉えるのではなく、「好きなことをやりきる熱量」であり、その行為こそが「表現未満、」だと考える。

「施設として、絵を描いたり、作品制作をしていたりした時期もありますが、それをルーティンにすると、暴れたりパニックを起こしてしまう人もいます。制作を中心に据えないようにしたから、行為そのものにバリエーションがでてきて、そのほうが圧倒的におもしろいと思っただけです。真っ赤なぬいぐるみの中を黒に塗りつぶしたり、がんこにこだわる行動の中に喜びを見つたり、もういいかげんにしろよという中から生まれてくることを、こちらがどう引き取って楽しむか。それをひたすら考えることこそが『表現未満、』なんです」と久保田さんはにっこりと微笑む。

様々な行為が生まれる「場」にこそパワーがある

そうした行為の先から生まれた「作品」が独り歩きしてしまうこともあった。美術館に作品が展示されるのはうれしい反面、自分たちがおもしろいと思っているプロセスが置いてきぼりになってしまったというまどいもあった。

「アート活動と障害をわけてはおもしろくない。作品は単なる作品になってしまうから。一方、現場からはたくさんアートのものが生まれている。一度現場に立ち返りたいと思ったんです。久保田さんは、自分たちの強みは「表現未満、」が生まれる「場」にあるのではないかと思に至った。

そこから誕生したのが「タイムトラベル100時間ツアー」だ。〈たけし文化センター〉に来て、まずは1泊2日と一緒に過ごす。プログラムは決まっておらず基本放置。利用者たちの写真と名前が書かれたカードを渡され、あとは一緒にごはんを食べたり、散歩へ行ったり、あるがままの〈たけし文化センター〉を体験するというものだ。

どうして100時間かという、彼らと4泊5日を過ごした学生たちの人生が変わったことがあったからだ。それまで障害のある人に接したことがなかった彼らの中にはここでの体験が忘れられなくて、教

育学部に行き直す人、大企業ではなくベンチャー企業に就職した人もいた。「1泊2日で終わってもいいし、そのあとも来てくれてもいい。障害のある人に、フラットに出会ってほしいんです」と久保田さん。

郊外から街なか(たけし文化センター)の新しい拠点を作ったことで、イベントがやりやすくなったし、おもしろそうなことを嗅ぎつけて訪れる人も増えてきたという。NPOになった20年前から「ソーシャル・インクルージョン(社会包摂)」を掲げて、ともに生きる社会を目指してきた。だから、「スタ☆タン」のようなものも生まれるし、街なか

に拠点があることが重要になる。アートには、社会の中の様々な問題、あるいは個人的な問題、苦しみ、悲しみに対して、一条の光となる力がある。固定化された価値観、様々なルールにがんじがらめになってしまった人、疎外されてしまう人たちに対して、新しい関係性を構築していく力もあると久保田さんは考えている。だとすると、〈たけし文化センター〉としての活動がまさにアートそのものだった。これからあるべき社会の姿を、おもしろおかしく照らしている。



6



8

6 久保田翠さんと息子の社さん、職員のササキユイイチさん。23歳になった社さんの未来を考えて、福祉の枠組みではなく、シェアハウスで共生する「実験」も始まっている。7 浜松駅から徒歩10分の繁華街にある〈たけし文化センター連尺町〉。8 社さんがいつも持ち歩いて音を鳴らしているタッパーと石。9 2階の音楽スタジオ。爆音セッションが始まることもあるけど、この時間は利用者も職員もこたつでごろり。



4 ジャンプしてシャウトするツツミリョウウカさん。5 タイムトラベル100時間ツアーは、毎月末に開催。福祉系、アート系のほか、口コミで噂を聞いて参加する人も。参加した時間分、スタンプを押してくれる。



5



7

《たけし文化センター連尺町》
静岡県浜松市中区連尺町314-30
電話：053-451-1355 <http://cslets.net>



9



一人ひとりがアーティスト。みんなが集まりたくなる魅力的な場所を作って、街の人たちと分かち合う。

02 大分県 大分市

ふくろうの森ビル

文・水島七恵 写真・中村紀志

温泉数、湧出量ともに日本一の温泉地、別府温泉から車で約25分。大分駅から車で約10分のところに、〈ふくろうの森ビル〉がある。障害のある人の就労支援施設〈やまねこ工房〉が入るこのビルでは、日々、同時多発的に物事が起きている。ビルのオーナーで、〈やまねこ工房〉を運営している一般社団法人〈あらやしき〉の代表理事を務める古山圭二さんは「ここは“就労支援施設”という形式をとった、人の垣根を作らない場所。なかでもビル1階の〈ジェラテリアふくろう〉は、〈やまねこ工房〉と社会をつなぐゲートウェイです」と、笑顔で話す。

イギリス製のステンドグラスの扉を開けると、高い天井に広々とした空間。点在するテーブルと椅子はアンティークのもので統一された〈ジェラテリアふくろう〉は、自家焙煎コーヒーと軽食、そして季節ごとにメニューが変わる手作りジェラートが人気だ。

レコードから流れる音楽に耳をすましながら、椅子にゆったりともたれかかっていると、〈やまねこ工房〉所属の安部侑希さんがカフェ自慢の自家焙煎コーヒーを淹れて運んできてくれた。自閉症の安部さんは幼い頃から絵を描くことが大好き。ビル2階の一室で絵を描きながら、コーヒー豆の選別作業とカフェ店員を務めている。

バー経営が福祉にも活かされている

古山さんが〈ふくろうの森ビル〉のオーナーになったのは、2016年のこと。それまで約10年、地元・大分でバーを経営しながらジャズのサクソ奏者でもあった古山さんが、就労支援施設も兼ねた複合施設ビルを作ろうと思った背景には、自身が小学生の頃に不登校を経験したことがあった。

「当時、不登校になる生徒は学校にはいなかったんで、僕がその記念すべき第一号に(笑)。映

画を観たり、家出をしたりして過ごしていたんですが、両親が夜の仕事に就いていた関係もあって、児童養護施設で暮らしていました。男ばかりの施設で、閉鎖的な空気が流れていて、子供ながらにその雰囲気違和感を覚えていました。そのときの経験がきっかけとなって高校卒業後に上京し、福祉関係の専門学校へ入学。今思えば、何か自分の力で変えたかったんでしょうね。児童養護施設での経験が自分の反骨精神を育みましたが、今は自分自身が行動し変化していくことが、未来に追いつける気がします」

専門学校卒業後は神奈川県内の社会福祉法人に就職し、支援員として働き始めた古山さん。「施設の常識や仕組みを変えたいと、作業所などの施設立ち上げなどに携わりました。自分なりにやるべきことに邁進した日々でした」と当時を振り返る古山さんは、36歳で大分へ帰郷。パートナーだった父親の仕事を継ぐように自身もその道へ。帰郷から3年



- 1 グアテマラが主軸のハウスブレンドコーヒーを淹れてくれた安部さん。
- 2 ジェラート担当は消火器好きで、消火器の絵を描く小野天哉さん。
- 3 ジェラートのメニュー開発や、メニュー作りも利用者の仕事。
- 4 取材中に焼き上がったケーキ。翌日のスペインギターのライブで販売するため、レシピを研究。
- 5 すだちミルクとこがしアーモンドの2種類のジェラート。



《ふくろうの森ビル》
大分県大分市王子中町3-5ふくろうの森ビル
電話：097-511-1293
<https://www.facebook.com/fukuroinomoribuild>

- 6 ジャズ、クラシック他、多国籍のライブ演奏を定期的で開催している〈ジェラテリアふくろう〉のカウンター席には数々のフライヤーが置かれている。
- 7 〈ふくろうの森ビル〉オーナーの古山圭二さん。
- 8 コーヒー豆の選別をしながら描いているという安部さんの作品。
- 9 英語の読み聞かせをやっている人の依頼で、オリジナル曲を作曲中の太田千晶さん。
- 10 〈ジェラテリアふくろう〉の外観。営業は月～金は10:00～17:00、土・日曜・祝日は11:00～17:00。

後には、10坪ほどの小さなバーをオープンさせた。「本当に多種多様なお客さんが遊びに来てくれました。カウンター越しにそんなお客さんたちと毎日楽しく交流をするにつれて、ふと僕は、この感覚を福祉とつなげられないだろうか?と、思い始めたのです」

風通しのよい空間。障害のあるなしにかかわらず多様な人が集い、働きながら面白いことが日々生まれていく。そんな場所を作りたい。心に灯った古山さんの想いは、バーを始めて10年後に形となる。「ちょうど50歳になる手前の頃でした。身体が十分に動く間にやりたいことをしようと思ったんです。それで物件を探しているうちにこのビルにたどり着いたわけですが、まさかビルを丸ごと買うことになるなんて思ってもみなかったんで、奥さんに報告するときはとても緊張しました(笑)」

ビル一棟。予想外のスケールに古山さんも最初は不安があったというが、いき初めてみると、〈や

まねこ工房〉の利用希望は多かった。現在、彼女たちは日々ジェラートやケーキ、自家焙煎珈琲の製造をはじめ、クラフト小物、ライブの企画運営、チラシ制作、SNSでの情報発信などを行っている。

現場で起きる生のグルーブを大切に

「おかげさまで外から『この場所で何かやりたいです』という、持ち込み企画や提携パートナー、スタッフ希望者が後を絶ちません。その結果、ビルのなかでは日々何かしらの催しが行われ、いろんな人が出入りしていますが、それもこれも計画はしていないんですよ。というか、むしろ僕自身は計画しない努力をしています」

持ち込み企画の場合、利用者をはじめから話し合いに入れてスペース代をあえて取らない代わりに、例えば〈ジェラテリアふくろう〉で特別メニューを開発したり、〈花屋そらうみ〉でお花の演出を盛

り込んだりと、その人なりの交流を図ってもらうようにしている。また料理が得意な人がいれば、カフェメニューの開発の相談に乗ってもらうことも。こうしてあえてルールを作らないことで生まれる現象を、古山さんはとても大切にしていた。

「ジャズのセッションでも同じプレイばかり繰り返しては、つまらない。それと一緒に、その瞬間でしか生まれないグルーブにこそ、〈ふくろうの森ビル〉の本質が宿るような気がしているんです。計画しない、把握しない。そこで起きる現象をおもしろがる。それがこのスタイルです。あ!!ひとつだけルールがありました(笑)。それはカフェで流しているレコードをかけ直すときは、ゆっくりと。業務にしないことがこの唯一のルールです」

チャミングなルールに思わず笑みがこぼれつつ、でもそれこそがこの場所を魅力的にしている本質であり、人が豊かに循環している理由でもあると感じた。



1

文・石井妙子 写真・高橋宗正

「なりたいものになれる場所」を点在させる

長野県・上田駅から歩いて15分。〈NPO 法人リベルテ〉は、観光客や買い物客でにぎわう旧北国街道沿いにある。商家を改装した建物の中をのぞくと、入り口のショップには〈リベルテ〉のメンバーが制作したアクセサリーや紙小物が並んでいた。街なかにあるこの場所は、〈リベルテ〉を多くの人を知るきっかけの一つ。さらに小・中学校でワークショップをしたり、地元企業のホームページの絵をメンバーが手がけたりと、街のいろいろな場所に〈リベルテ〉の存在がにじみ出ている。

施設長の武捨和貴さんは「リベルテを避難所だと思っている」と言う。どうい障害があるどこの誰、というレッテルからなるべく解放されて、

なりたいものになれる場所。「こうした“リベルテ的”な場所が外に増えていくとメンバーは街にやすくなるし、街の人にとっても日常を振り返る機会になるんじゃないかと思う。そういう場所を、外に点在させる取り組みをしています」

午前10時。近くの商店街にある劇場兼ゲストハウス「扉の角」に、カフェ「リベルテの角」がオープンする。注文を取るのもコーヒーを淹れるのも、リベルテのメンバーたちだ。

カフェ営業を〈リベルテ〉に持ちかけたのは、劇場主宰者の荒井洋文さん。けれど当初は障害がある彼らに任せることに不安もあった。実際、注文を間違えたり、お客さんに呼ばれても気づかなかったりすることもある。メンバーの見た目から障害が分かりにくいこともあって、戸惑いやイライラした様子を見せるお客さんもいた。

「最初はフォローしていましたが、武捨さんと話すうちに考えが変わって。ここはこういうスタイルだと認知されてお客さんにも合わせてもらう、その

1 カフェ「リベルテの角」スタッフ。左端が荒井洋文さん。2 自身もリベルテファンという VALUE BOOKS の西山卓郎さん。3 アトリエではメンバーが思い思いに創作を行う。4 あるメンバーのマンガは「フレフレブックス」の寄付金で出版が実現した。5 地元の映画館「上田映劇」でもメンバーが作ったグッズを販売。「上田の街はコンパクトなぶんカルチャーのつながりも濃い」と支配人の長岡俊平さん。6 「スタッフや外の人に相談する時間を大切にしている」と話す施設長の武捨和貴さん。



3



4



2

03 長野県 上田市 リベルテ

ぐらいでいいのかなと思うようになりました」1日2時間カフェに通うことから始めたメンバーが、やがて長く接客できるようになった。一つのことを続けるのが苦手だった別のメンバーも、カフェの仕事はずっと続けている。

「社会に出ると『100% やらないとダメ』と言われることが多いけど、ここは結果が10%でも、90%の余白を持って見てくれる。働き方など実験しやすい環境もありたいです。『障害者支援施設でしょ』の一言で終わらない、いろいろな人が集まる場があるのはすごく大切なこと」と武捨さん。

福祉支援が目的の〈リベルテ〉と売り上げを求める扉の角とで、考えがずれる部分もある。でも二人は「ズレがあるから、いい余白が生まれる」と話す。荒井さんにとって〈リベルテ〉は自分たちの活動を相対化して考えるきっかけをくれる存在だし、武捨さんにとって荒井さんは、日々感じたことから地域の未来まで相談できるパートナー。そういう関係が徒歩圏内にあることが、おもしろいと感じている。

こうした地域のプロジェクトに誘われたら「来るもの拒まず」が武捨さんの基本的なスタンスだ。



5



6

障害や肩書きのレッテルから解放される場所を地域に点在させれば、きっと街の人にとっての日常も変わる。

大切にしているのが、協力者との方向性に余白を持った関わりかたを探ること。

「〈リベルテ〉はいつも外に開いていて、『こういうことをやってみたくいけど、どうですか?』とお願いしやすい。それはすごく大きいと思います」

そう話すのは上田を拠点とする古本販売会社、VALUE BOOKS の西山卓郎さん。〈リベルテ〉は、彼らが立ち上げた地域の NPO 団体を支援する寄付プロジェクト「フレフレブックス」に参加している。賛同者が読まなくなった本を売り、その買い取り金を応援したい団体に寄付できる仕組みだ。地元の老舗映画館「上田映劇」でも「フレフレブックス」コーナーを設けるなど、活動は街じゅうに広がっている。集まった寄付金で「リベルテ出版」を立ち上げ、メンバーが描いたマンガを出版した。

さらに「フレフレブックス」をきっかけに、県内のスターバックスコーヒーと〈リベルテ〉のプロジェクトも始まった。店舗でメンバーの作品を展示した時は、家族や通院する病院のスタッフなど、普段はアートと距離がある人たちが見に来てさまざまな反応くれた。「自分たちだけでは到底できなかったことでした」と武捨さんはうれしそうに振り返る。

VALUE BOOKS にもスターバックスコーヒーにも〈リベルテ〉の作品のファンになったスタッフがいて、彼らの熱がプロジェクトの原動力になった。

「VALUE BOOKS のスタッフが〈リベルテ〉のメンバーを呼んでイベントを開いたり、自分の視点で作品をキュレーション（情報編集）してくれる。それはすごくいいことだと思う。僕の視点だけで紹介するより、その人の見方でリベルテを伝えてもらった方がいいと思うから」と武捨さんはおおらかに話す。

外の視点を混ぜるとおもしろくなるから

福祉のプロフェッショナルである武捨さんだが、少し意外な言葉を口にした。

「僕は自分の支援が、あまり上手だと思わないんです。自分の考えが正しいか自信がない。だから地域に出ていくのかもしれない。外の声を聞くと、より面白いものになると思うから」

自分たちスタッフは、メンバーが外の世界とつながるための「扉」の役割。だから風通しよく地域とつながってほしい、それが武捨さんの思いだ。

「病院や行政の支援を受けていると、一見地域で暮らしているように見えても、実際は支援者しか会わずに生活するメンバーもいる。そういうなかで、たとえば VALUE BOOKS のスタッフとメンバーが会うのは意味があること。まずは僕らが外とつながることが大切なんだと思っています」



7



8

7 リベルテの建物入り口にあるショップには、メンバーが手がけたバッグやアクセサリー、紙小物が並ぶ。8 街なかのショップが発信地となって活動が広がっていく。

〈NPO 法人リベルテ〉
長野県上田市中央4-7-23
電話：0268-75-7883 <https://npo-liberte.org>



1

04 茨城県 大子町 袋田病院

文・井上英樹 写真・萬田康文



袋田病院がある意味を再認識した気がしますね。ここは囲炉裏のような暖かい場所なんだと

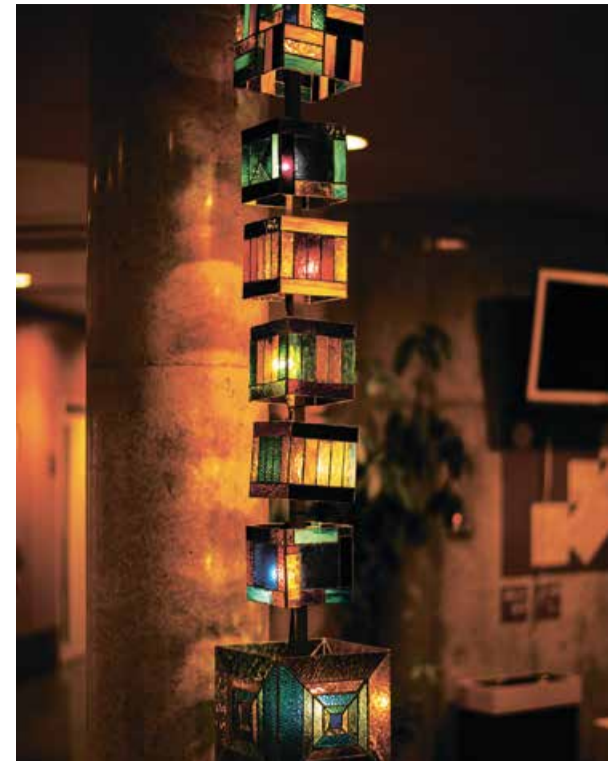


4

1 旧病棟に展示された作品。視界が逆さまになり、天井に人がいる幻覚を再現した。実際に幻覚を体験したかのような気分になる。2 アトリエ近くに設置されたフェスタ限定の足湯。3 アトリエ活動が終わり、談笑している皆さん。4 霊安室に展示された院長先生のインスタレーション。

日本三名瀑のひとつに数えられる袋田の滝。そのすぐ近くに「袋田病院」という精神科病院がある。昨年、「袋田病院美術館（アートフェスタ2019）」が開催された。〈袋田病院〉では2013年から年に一度、アートフェスタを行い、地域の人を招いている。フェスタは患者や職員らがアートを介して精神科医療の歴史や課題を掘り起こし、これからの医療や生き方を考える創造的実験を試みているのだという。

フェスタ当日は秋晴れの気持ちのよい日だった。しかし、開催前に日本中を襲った台風19号による被害は、ここ袋田病院周辺にも及んでいた。周囲の河川は氾濫し、橋が崩落した。床上浸水した患者や職員の家もあった。被害は深刻で「この時期にフェスタを行う意味があるのか？」という声内外から起きた。当初2日間にわたって行われる予定だったフェスタは1日のみの開催となった。しかし、袋田病院を訪れた人の顔や、スタッフの楽しそうな表情を見ると、開催が間違いでなかったことがわかる。「やる意味を考え抜いた」と実行委員長の上原耕生さんは言う。「台風の後、みんなと顔を合わせてホッとした。そこに囲炉裏のような暖かさがあった。〈袋田病院〉に行けば、仲間やスタッフなど知った顔がある。地域に



5

患者が壁を叩いた跡が「作品」に

実を言うと、精神科病院を訪れることに対し、私は少し緊張していた。しかし、実際に訪れるとそれが杞憂であったことを実感した。「想像の精神科病院」と大きな違いがあったのだ。たしかに、少々不思議な行動を取る人を見かけたが、話したり挨拶をする優しい人が多いように感じた。勝手に「こちら側」と「あちら側」で線を引いている自分がいることを知った。

フェスタでは旧病棟が展示場所になっていた。その廊下の壁に大きな穴が空いているのを見つけた。穴の周囲にはフレームが付けられており、「作品」になっていた。「患者さんが壁を叩いた跡です」と、作業療法士の渡邊慶子さんは笑う。見回すとたくさんの「作品」が並んでいた。人間の行動の深層を知り、解決していく、もしくは寄り添っていくことが精神科病院の役目の一つだろう。その過程で生まれた穴さえも、アートという視座から見れば

違う解釈ができる。人体が天井から逆さまにぶら下がっている展示があった。患者が見た世界を表現したのだそうだ。傍らで作品解説をしているのは病院のスタッフや患者だ。アートを見学しながら精神科医療に触れ、自分自身を知る時間でもあった。

〈袋田病院〉ではデイケアホロスという造形活動（運動やカラオケも）を行う場がある。ホロスはギリシャ語で全体性の意味を持つ。つまり、個性の集まりであることを示している。「活動で生まれた作品を治療や分析的に使ってはいません。表現活動のひとつだと考えています。ですが、ホロスに通うことでアートや技法に出会い、実際にステンドグラス作家としてスタートした人もいます」と渡邊さんが嬉しそうに教えてくれた。ただ、「精神科病院にいる人だからすごい作品を作るわけではない」と上原さんは言う。「草間彌生さんのような

クリエイティブな人ばかりがいるイメージを持っている人がいる。だけど、現実はそのじゃない。クリエイティブな人も、そうじゃない人もいる。ただ、特徴はなにかというと、すごく執着心のある人が多いことでしょうか。好き嫌いがはっきりしているんです。だけど、「これが好き」と、マッチすると制作に没



7

精神科病院で年に一度開かれるアートフェスタ。そこに集う患者や地域の人たちがつくりだした場所。



6

5 三代一生（みよいつせい）さんの制作した照明。家族をテーマに作品にした。6 作業療法士の渡邊慶子さんと現代美術作家の上原耕生さん。上原さんは袋田病院と関わり合いながら自身の作品制作もしている。7 患者が壁を叩いた跡を見方を変えると作品になる。

頭する。その時に、面白い作品が誕生することがあるんですよ。実際にアトリエを見学させてもらって、寝ている人、おしゃべりしている人、制作に没頭している人がいた。共通しているのは、ここが彼らにとってかけがえのない場所ということだ。ホロスという場所がひとつの作品のように、病院敷地内の高台にそっと存在していた。

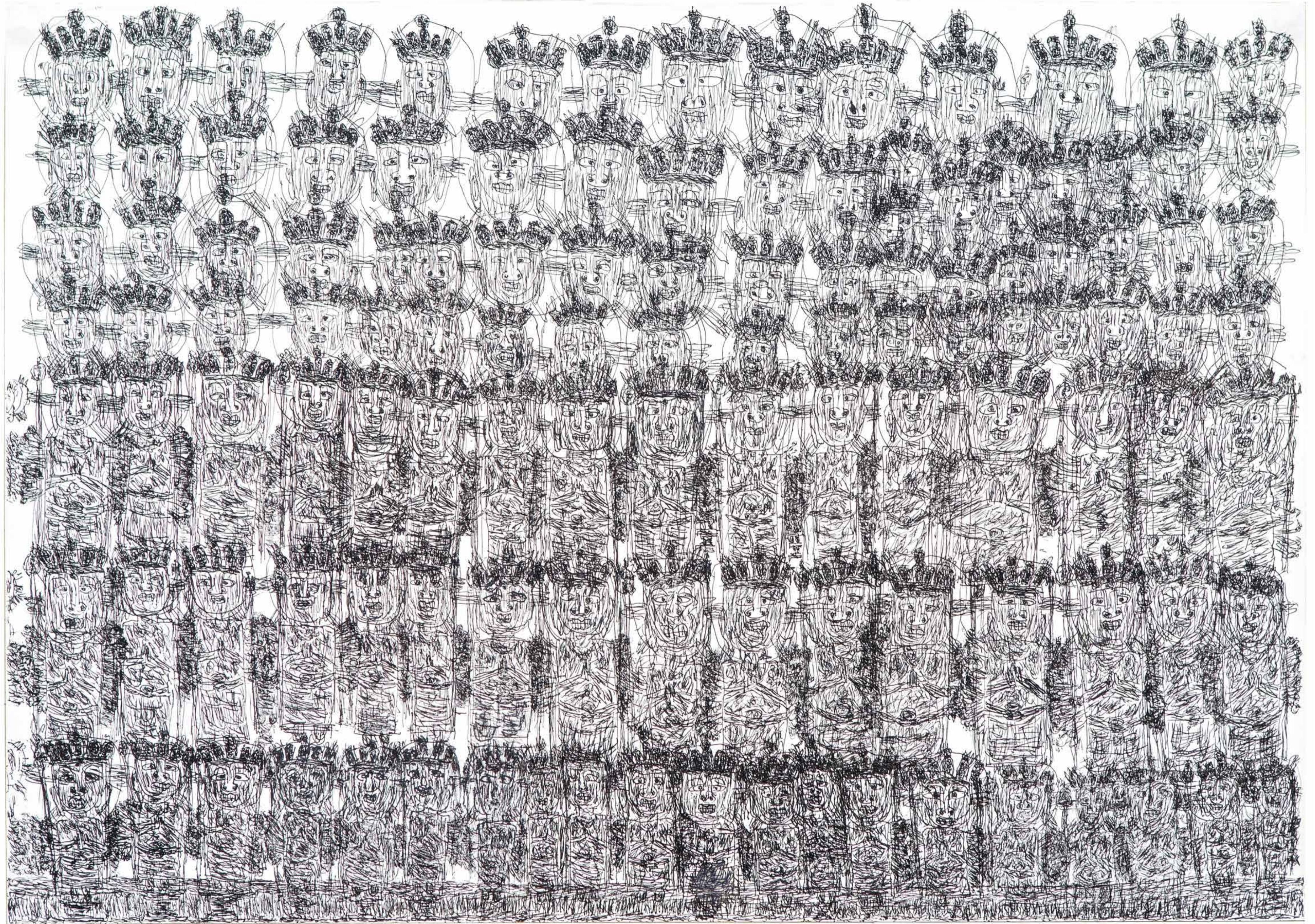
地域の人に言われた言葉を

フェスタは〈袋田病院〉にとっての一面にすぎない。関わる人全てにそれぞれの思いがあるはずだ。「精神科病院を開放する」ことに対して、ネガティブな感情を抱く人もいたかもしれない。が、病院を開いたことで変わったことがあると渡邊さんは感じている。「以前、地域の子どもは『悪いことをすると、袋田病院に入れるぞ!』と叱られたそうなんです。だけど、今は変わりました。『病院が何をやってるのが見えてきた。この地に袋田病院があることを誇りに思う』って。そんなことを話してくれた地域の人がありました。」

茨城県にあるこの小さな精神科病院のフェスタや取り組みは、医療の世界から見ると小さな一歩かもしれない。しかし、ここを訪れる人にとっては大きな経験だ。〈袋田病院〉の理念には「新しい時代に要請される精神科医療を創造的に実践していくこと」との一節ある。〈袋田病院〉は大勢の人を巻き込みながら、その理念を慎重に実践している。



《医療法人直志会 袋田病院》
茨城県久慈郡大子町大字北田気76
電話：0295-72-2371 <https://www.fukuroda-hp.jp>



P. 12 : 文・石井妙子 写真・高橋宗正
P. 15 : 文・水島七恵 写真・中村世志
P. 16 : 文・浪花朱音 写真・Ayami

栗原勝之さんの作品「三十三間堂」(5枚連作のうちの1枚) / 顔料ペン / 770×540mm / 2018年
ペン5本分を費やし、濃密に描き込んだ作品。黒一色ながら一体ずつ違う表情に見入ってしまう。



栗原勝之 / KURIHARA Katsuyuki

一つひとつ性格が違って見える
オリジナルの仏像ワールド

きっかけは仏像図鑑との出会いだった。長野の雄大な山並みに見守られる障害者支援施設〈たてしなホーム〉で工芸班に所属している栗原勝之さん。ここ2年ほどずっと、仏像の絵と陶芸作品の創作に熱中している。

絵に使うのは黒いペン1本。かたわらの仏像写真をじっと見つめ、迷いなく描きとっていく。幾重にも線を重ねるうち、表情豊かな阿彌陀如来像や地藏像が白い紙を大胆に埋め尽くしていった。以前は使い慣れたマジックで描いていたが、それでは仏像のディテールまで描けない。それを言葉にできず混乱した表情を見せたり手を止めた様子を見て、制作をサポートする職員の小野道佳さんがモチーフに合った細さのペンを用意。すると小野さんも驚くほど細部まで描き込むようになり、緻密さとダイナミックさが同居する現在のスタイルが生まれた。

手本の写真では厳かだった仏像が、作品では豊かな表情と躍動感を手に入れる。陶芸の「阿修羅像」は植物のようによきによき伸びる手がユーモラスだし、「鑑真和尚坐像」は思わず話しかけたくなくなる。立体作品では、いつも最後に目を入れる栗原さん。丸っこい愛らしい目は、心に届くような優しい眼差しをくれる。



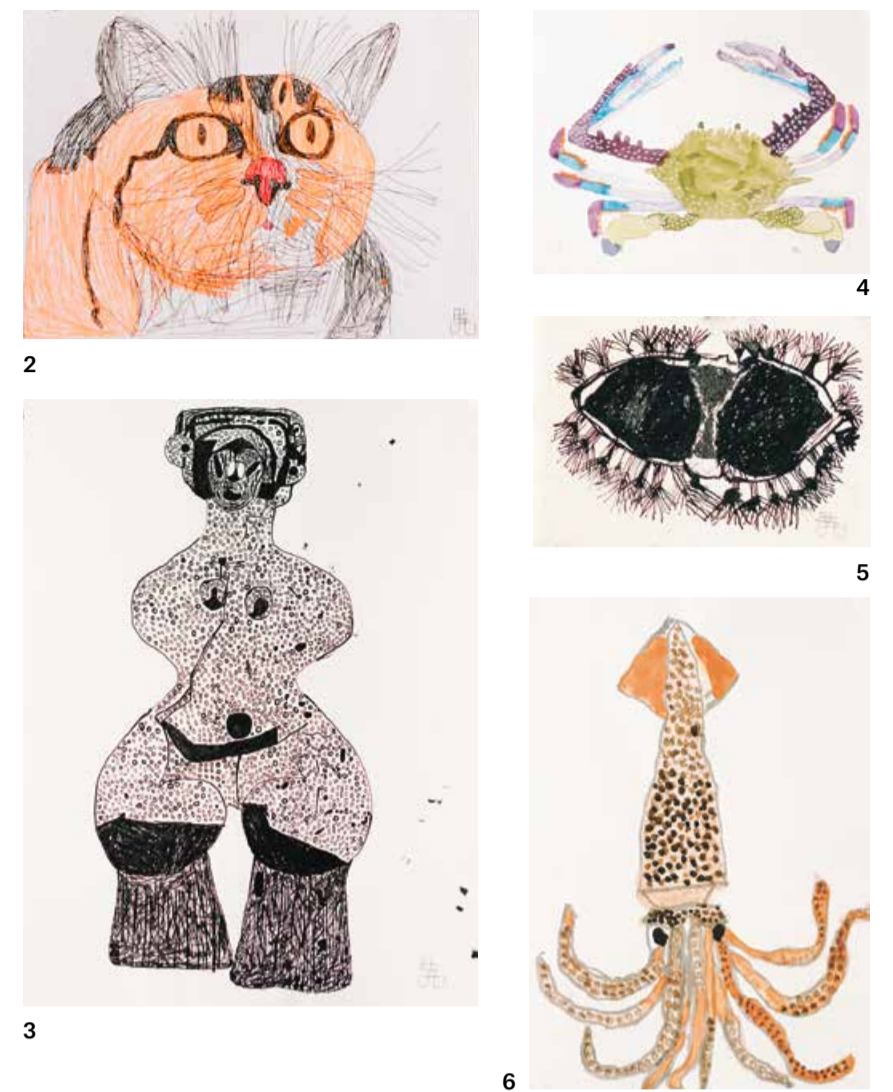
1 釉薬をかけて焼成する工程は陶芸家としても活動する施設職員の小野さんが担当。左「鑑真和尚坐像」／陶土／W140×D120×H120mm／2018年 右「阿修羅像」／陶土／W200×D130×H230mm／2018年 2「仏像シリーズ1」／顔料ペン／400×550mm／2018年 3 手本の写真を見ながら、1枚の紙の中にさまざまな仏像を自由に組み合わせていく。



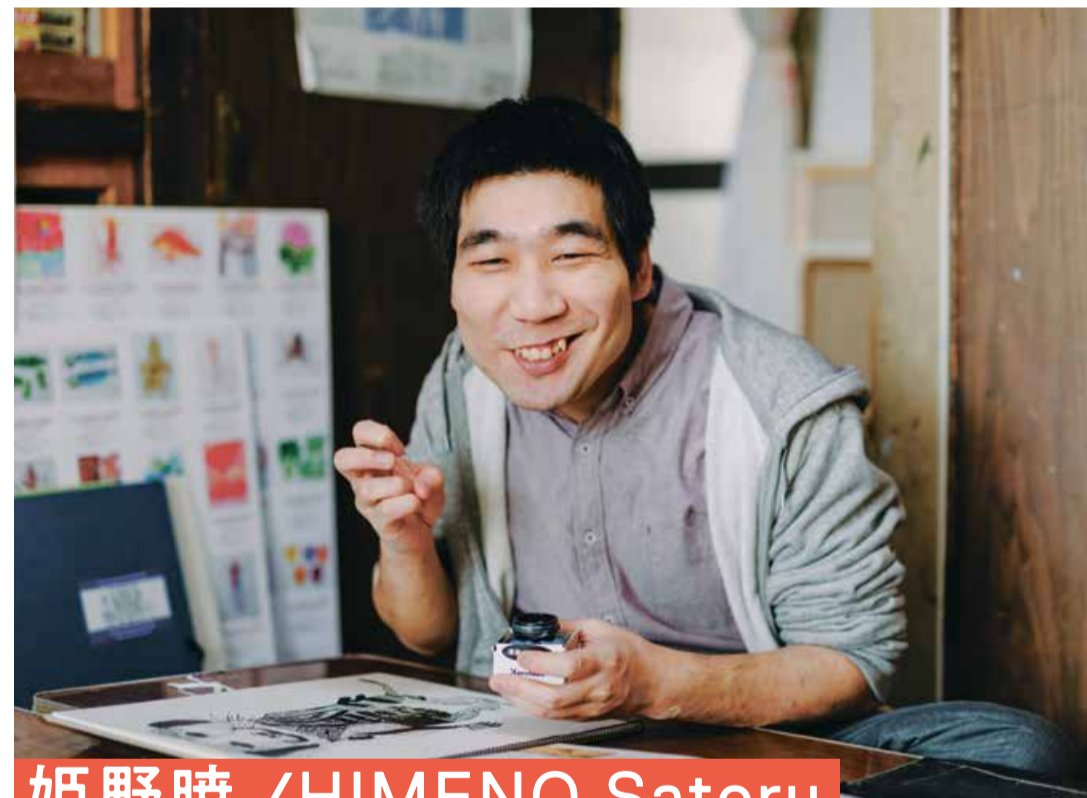
2



1「フクロウ」／ペン・画用紙／405×310mm／2018 2「ネコ」／ボールペン・画用紙／175×125mm／2017年 3「縄文のヴィーナス」／ペン・画用紙／405×310mm／2018年



4「カニ」／水彩・画用紙／310×405mm／2013年
5「クリ」／ペン・画仙紙／100×150mm／2019年
6「イカ」／水彩・画用紙／405×310mm／制作年不詳



姫野暁 / HIMENO Satoru

下書きはしない。その瞬間、
瞬間の感動を竹ペンに込めて

幼い頃からハサミを上手に使い、折り紙で鶴や、風船などを丁寧に折っていたという姫野さん。その様子を見ていた母、睦子さんの勧めで絵を描くようになり、13歳の頃から近所で絵画教室を開いていた画家の田中巖久さんの自宅に通い始める。田中さんの指導のもと、ハサミやホッチキスなど、まずは身の周りにあるものを描くことから始めながら、魚や野菜、植物や動物など、絵の題材もまた多様になっていった。

次第にその才能が開花し、なかでも竹ペンと漫画インクを使った絵の制作に集中するようになった姫野さんの絵は、

少しずつ社会のなかで評価されるようになる。障害のあるアーティストの才能を支援するエイブル・アート・ジャパンの登録作家に全国の多くの応募者の中から選出された。

2019年にはスターバックス別府公園店にて原画を展示し、今年の2月には大分県立美術館(OPAM)にて行われた、おおいだ障がい者アート展 vol.1 日常のアート「ボクラの世界」にも参加した。

「ミーラ(ア)キャット、描いている、描いた。ミーラキャット、好き」。描き始めたら止まらない姫野さんに代わり、田中さんの集中力が切れたときが、終わりの時間の合図だ。



7



9

10

丈六萌寧 / JYOUROKU Mone

描きたい線、塗りたい色に まっすぐ、正直に

和歌山県の絵画教室〈ほっとチョコレート〉の教室で、ひとりの女の子に目がとまった。丈六萌寧さん、13歳。画面の隅々まで広がっていく豊かな色彩と、迷うことなく引かれていく線。動物図鑑を参考にモチーフを決めると、教室の開かれる2時間であっという間に作品を完成させてしまう。自分の描きたい世界に向き合う姿は、“正直”そのもの。

そしてそのまっすぐさが、絵によく表れている。普段から絵を描くことが好きだという萌寧さんだが、その美しい名前は画家のクロード・モネから名付けられたそう。

晩年まで睡蓮シリーズを何百枚と描き、世界中で愛されてきたモネのように、この先も彼女らしい絵を描き続けてくれるはずだ。



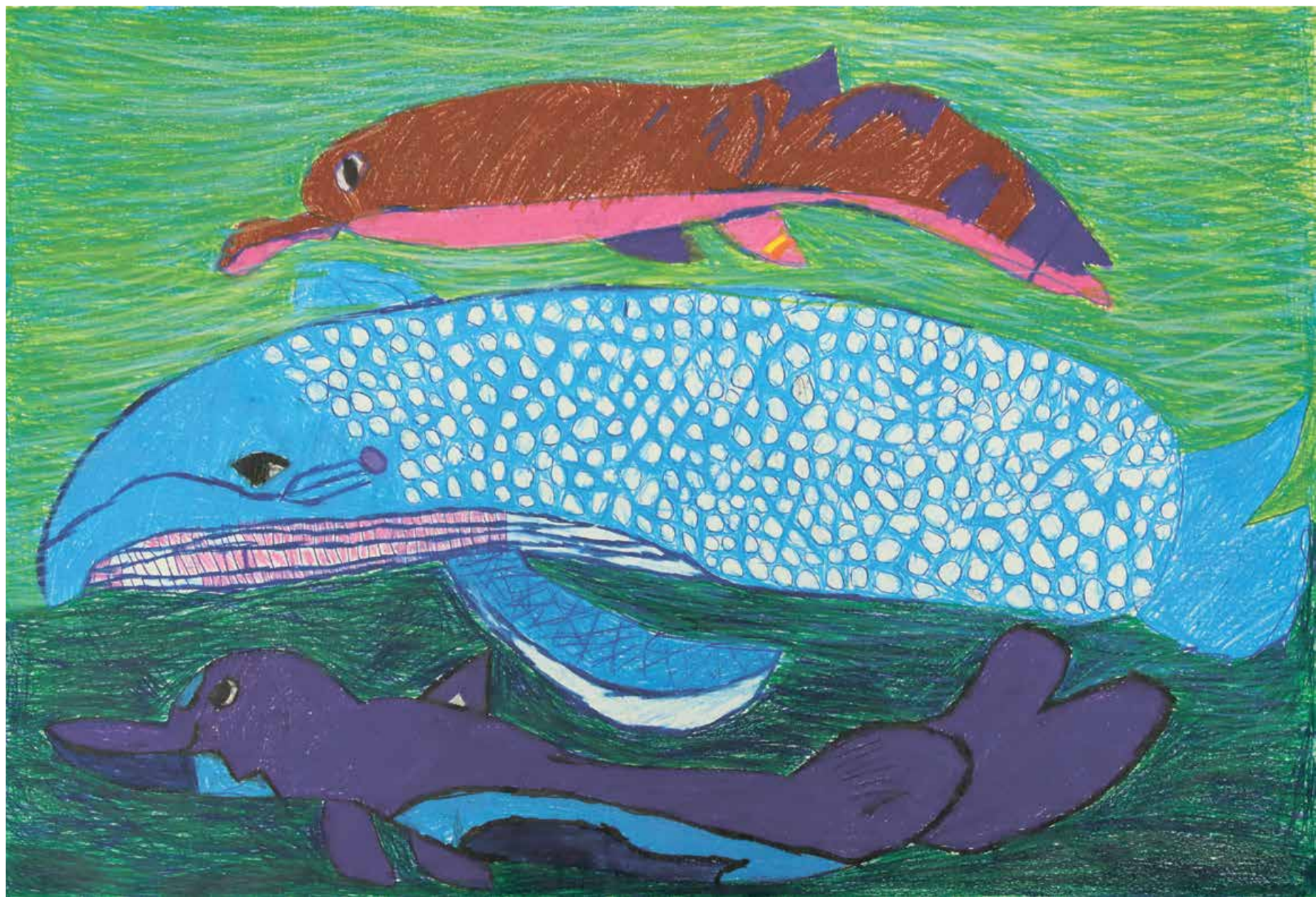
1



1「海の生き物」シリーズより/水彩・グリスペンシル/540×375mm/2019年 2 一心不乱に猿を描く萌寧さん。3「海の生き物」シリーズより/グリスペンシル/540×375mm/2019年 4「海の生き物」シリーズより/グリスペンシル/940×640mm/2019年



3



4

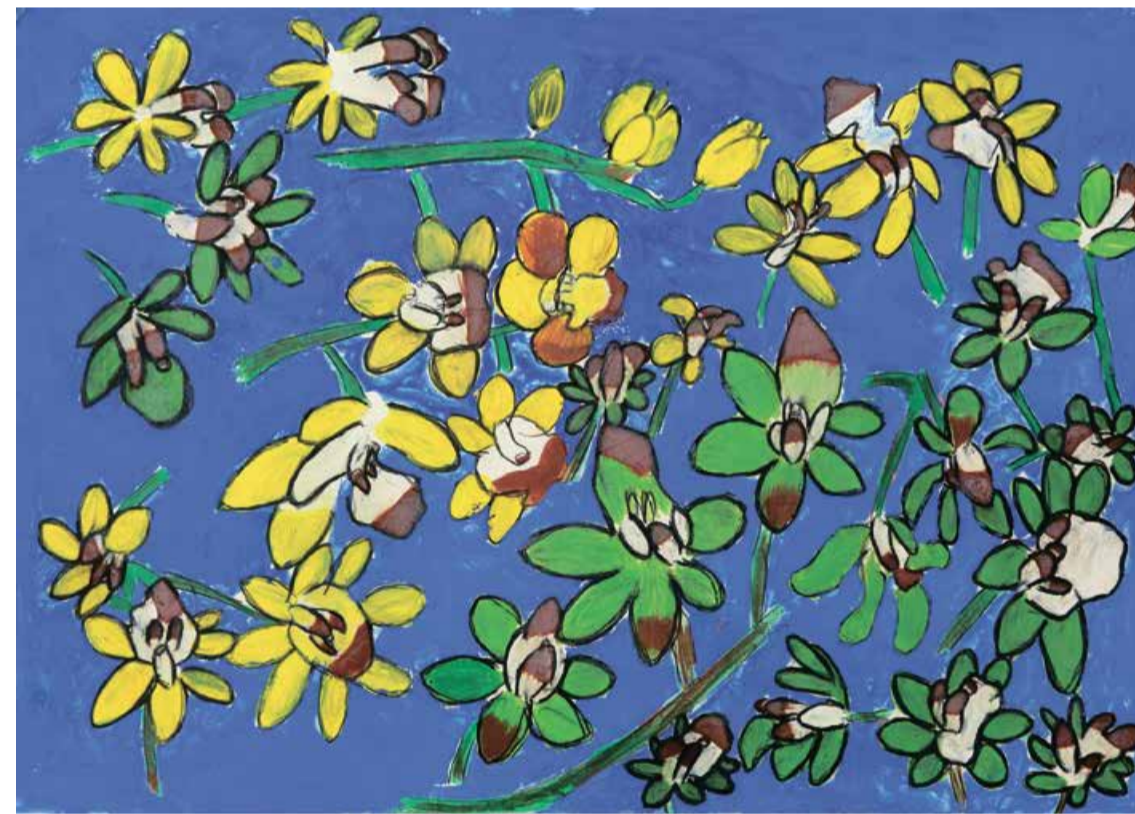


1

彌園哲志 / MISONO Satoshi

さまざまな飛行機が 紙の上に飛ぶ “デザインの”な絵画

彌園哲志さんの制作スタイルは特徴的だ。グリスペンシル(ダーマトグラフ)という画材を用いて、力強い筆圧で丁寧に描く。絵画教室〈ほっとチョコレート〉で10年以上絵を描き続ける中、取り組むモチーフは動物、ロボットなどを経て、最近は飛行機。機体の個性を見抜きながら、それぞれに合う色を吟味し、1クラスで1機完成するぐらいのゆっくりとしたペースで描いていく。細部まで描き込まれたモチーフはもちろんのこと、それぞれの絶妙な“間”も、作品の魅力のひとつだ。



2



3



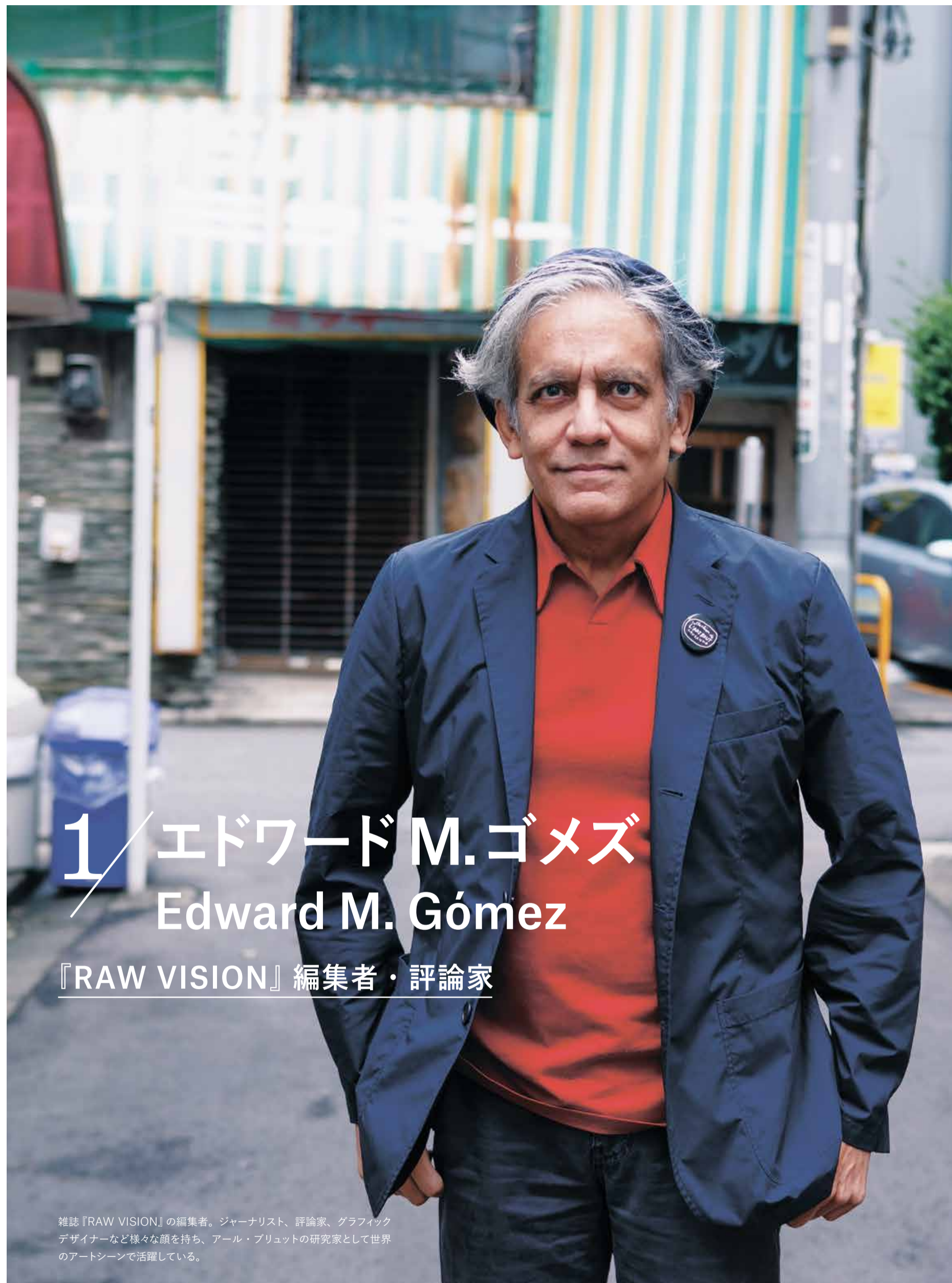
4

5



1「飛行機」シリーズより/グリスペンシル/910×600mm/2017年 2「花」シリーズより/水彩・グリスペンシル/595×420mm/2015年 3「乗り物」シリーズより/グリスペンシル/835×550mm/2018年 4 色や線を重ねていくうちにモチーフの輪郭がぼやけていき、不思議な立体感を生み出す。5 図鑑を見て描きながらも、独創性溢れる作風の哲志さん。

INTERVIEW



1/ エドワード M. ゴメズ Edward M. Gómez

『RAW VISION』編集者・評論家

雑誌『RAW VISION』の編集者。ジャーナリスト、評論家、グラフィックデザイナーなど様々な顔を持ち、アール・ブリュットの研究者として世界のアートシーンで活躍している。

私は常にアーティストのエネルギーを探している。

エドワード M. ゴメズさんはスイス、アメリカ、日本に拠点をもち、ジャーナリスト、作家、評論家、グラフィックデザイナー、キュレーター、環境保護論者など様々な活動をしている。その多様な仕事を貫くのがアートだ。ゴメズさんに、多様性のあるアートについて聞いた。

文・井上英樹 写真・高橋宗正

流暢な日本語を話すエドワード M. ゴメズさん。数カ国語を巧みに操り、世界各地のアートシーンの情報を、ご自身が編集する雑誌やウェブサイトが発信する。スイスとニューヨークに加え、2019年末には東京に拠点を構えた。ゴメズさんは今、多様性のある日本のアートに注目している。その理由はなんなのだろうか。

——ゴメズさんはアートをどのように見えていますか？

私の専門はアール・ブリュットと現代アートです。「アール・ブリュット」は作家が美術の教育や訓練を受けている、受けていないは関係ありません。私は等しく批評的な方法で見えています。アートには様々な表現手法がありますが、私は手技が残るアートに特別な思い入れがあります。テーマに関して言うと、家族の関係が伝わる「人間性」を感じる作品に強い関心がありますね。

鑑賞後、答えをすぐに求めようとする人がいます。「これ、どういう意味ですか？」って。しかし、「アートの意味」なんてないときがあるし、なんとでも言えます。むしろアートとは「その問いを考えること」だと思う。だからこそ、アートは私たちを自由にしてくれる。

アートをどう鑑賞するか。私の場合は、「作品がなにを言っているのか」に注目します。そして、外見や特徴について注意深く見てみます。次に「技術的なクオリティ」です。この作家にはどのような技巧があるのか、どんなスタイルなのか。テーマがある場合、どういう主題なのか。風景画なのか、静物画なのかを見ていく。そして、なにより大事なものは、言語を超えた部分を司る雰囲気を感じることです。私はそれに触れると、「もっと作家のことを知りたい」という感情が湧き上がってきます。インパクトのある作品に出合ったとき、なにかを表現したくなる衝動に駆られることはありませんか？ 本当に強烈な個性を持つ作品とは、そんな力を持っている。そういう言語を超えた気持ちにさせるのがアートの力だと思います。

——障害者支援施設やサポートをする人の影響力をゴメズさんはどう感じていますか？

サポートする人や障害者支援施設の方たちに話を聞くと、多くは「教えていない」と言いますね。画材や素材は用意しますし、時には使い方も教えるかもしれない。ですが、その先の「なにをどうするのか」は教えていない場合がほとんどかと思えます。しかしながら、環境で作風は左右されるでしょう。たとえば、焼き物が有名な土地だと、設備や技術を持ったスタッフがいるでしょうから、窯で焼いた作品が登場するでしょう。資金が豊かなところは、広いスペースがあるので大きなドローイング作品の制作が可能です。反対に小規模施設でできることは、画材を限定したドローイングですね。

ですが、アール・ブリュットの面白いところは素材から「なにかを発見し、発展」していくことです。ここが面白い。(「やまなみ工房」の鎌江一美さんは粘土という素材を「どう使うか」を発見し、あの素晴らしい作品群を生み出した。あの粘土の使い方に彼女のオリジナリティや面白みがある。大きな施設であれ、小さな施設であれ、素材の使い方の発見がある。それはそれぞれの施設で独自になにかを編み出していると思います。

——ゴメズさんが編集する『RAW VISION』はどのようなメディアですか？

『RAW VISION』は「多様性を称える」ことをテーマにしています。この雑誌が窓口となって、アートの中に「ダイバーシティ・アート(多様性のあるアート)」があることに気付いてもらう役割を果たしているかと自負しています。今、アートの世界でもダイバーシティ・アートは非常に注目されています。私はダイバーシティ・アートをより広い文脈で位置づけたいと考えています。そもそも多様性という言葉は、一言では語れない。まさに多様で、複雑であるわけです。ダイバーシティ・アートはそれだけ豊かな存在だと思っています。

——現在、日本には「アール・ブリュット」「アウトサイダー・アート」「エイブル・アート」「ダイバーシティ・アート」など、様々な呼び方があり、呼び方が定まらない。この状況をどうご覧になっていますか？

そうですね。日本には呼び方がたくさんありますね。理由はいくつかあると思います。1つ目は「すでに日本にあったから」です。たとえば「ダイバーシティ・アート」という言葉は、この20年ほど世界で盛り上がっていますが、それ以前に日本では独自の活動が存在していましたよね。「ダイバーシティ・アート」という概念自体、後から日本にやって来ています。つまり、すでに「あった」わけです。2つ目は、これも1つ目と関連しますが「借り物の言葉」だということ。フランス語の「アール・ブリュット」をカタカナにしたとしても、丁寧に説明しなければ、多くの人はわからない。そして、説明することに意味がずれることもある(笑)。3つ目は、……これは私からの質問です。そもそも、「日本のアール・ブリュット」や「日本のアウトサイダー・アート」を定義することができるのでしょうか。「アール・ブリュット」という言葉を作った画家のジャン・デュビュッフの定義では、存在そのものがアイデンティティであって、国籍の壁がないのです。

——国籍の壁がないということは、地域性もないということでしょうか？

いえ、地域性がないという意味ではありません。

日本におけるアール・ブリュットには様々な特徴があります。特に「手先が器用な作品」が多い。たとえば「やまなみ工房」の鎌江さんや「工房集」の野本竜士さんの用いる接着剤など、非常に細かい作業が繰り返される作品があります。素材の選択も非常に面白いですね。接着剤なんてほかの国で見たことがない(笑)。

ドローイングでも徹底的に描くという特徴があります。そして、描写する線そのものに豊かな表現が含まれています。日本に漢字文化があるから、線の豊かさが生まれているのではないかと解釈しています。

最後に申し上げたい特徴は「執着」です。線、素材、切り込みなどを執拗に繰り返す。また、小さなスペースに息苦しいぐらいにものを詰め込む作品がある。文学を含めた日本文化に時折、そのような傾向を見ることがあります。「偏愛」とでも表現しましょうか。紫式部や三島由紀夫の文学にも、大島渚の映画にも、草間彌生のアートにも「偏愛」を見ることができる。日本の美術教育は伝統的に素材から学び、可能性を引き出す傾向がある。だからでしょう、アール・ブリュットにも紙、粘土、木、墨などの可能性を発見しているように感じます。日本は素材に学ぶ傾向がある。

西洋の美術教育は、最初にアイデアがあります。そして、アイデアを実現するために技術や素材を探す。最近の美術学生たちはあまりドローイングをしない。コンセプチュアル・アートの登場で、必ずしもアーティスト全員が描く必要がないからです。ですが、科学の共通言語が数学であるように、アートの共通言語はドローイングです。私は学生達には、必ず描いてほしいと伝えています。

私は本物のアーティストは息をするように「描かなくてはいけない」と思う。多くのアール・ブリュット作家たちは作品を毎日作ります。止まらない人もいる。その姿に、私は力強いエネルギーを見ます。私たちは作家からほとぼるエネルギーを感じ、心を動かされる。日本や世界という国籍は関係ない。アートを学んだ、学んでいないは関係がない。私は展示を見た瞬間、作品に触れた瞬間、心が震える瞬間が大好きです。私は本物のアーティストのエネルギーを常に探しているのです。





2 / ニコラ・フィリベール Nicolas Philibert 映画監督

他者を通じて世界を発見するために、私は映画を撮り続けている。

出自も違えば育ってきた文化も、肌の色も、社会階層も違う。そうした看護師の卵たちが一緒に学び、葛藤し、成長していく群像劇を描いた『人生、ただいま修行中』。いつだってニコラ・フィリベール監督は、他者を通じて世界を発見する。

— 医療関係者のなかでも、看護師にフォーカスを当てようと思った理由とは？

そもそも私が興味を抱くのはスターではなく、日常のヒーロー・ヒロインたち。看護師はまさに私にとってそういう存在なのです。看護師の仕事は非常に過酷で、低賃金で勤務時間も不規則のなか、患者が抱えている様々な苦痛を日常的に受け止めなければいけません。ところが実際の社会ではこの現実とはほど遠い、どこか「白衣の天使」という理想像、ステレオタイプなイメージが溢れているように思っていました。つまり私は、看護師の現場がきちんと語られる機会や場所がありません。に、ジレンマがあったのです。

— 物語は看護師の心得や治療技術の習得を経て、実際の病院での研修へと移行します。この研修で生徒たちは様々な現実と直面しますね。

講義の段階では患者は紙の上だけにしか存在していないのです。つまり他者の命と距離がある。それが研修を通してようやく現実味を帯びてくるのです。病気に苦しみ、死を迎える“本物の”患者

と向き合うこと。それは多くの生徒にとってショッキングで、残酷な試練となります。

— その後の“研修の感想”を生徒が講師に語るシーンを観ながら、看護師が抱えているもの重さと同時に、いかに複雑な仕事であるかということを考えさせられました。

これは看護師という職業に限りませんが、人のケアをする立場にある人というのは、勇気がある人、他者に対する想像力を絶やさないと私は思うんです。そしてその想像力を持って、創意工夫ができる人。日常をルーチンワークすることなく、他者の持つ能動性を呼び覚ますことができる人。実際に研修をしながら、生徒たちは自分の心の部分も試されます。この作品では看護師、ケアをする立場にある人のそうした側面も撮りたいと思ったのです。

— 監督は映画を通じて、人々の日常のすぐそばにありながら、多くの人が積極的に目を向けてこなかった世界を映し出してきました。自分の知らない世界、そしてそこに属する人々へと向かうとき、恐怖心を抱くことはありませんか？

当然、近づいて傷つくのも、傷つけてしまうのも怖いですよ。でも、それでは前には進めません。だから私は、その恐怖心を少しでも軽減するために、ドキュメンタリー映画を撮り続けてきました。

1951年フランス・ナンシー生まれ。『指導者の声』(1978年)でデビュー。これまでの作品に『音のない世界で』(1992年)、『ぼくの好きな先生』(2002年)などがある。本作は『かつて、ノルマンディーで』(2007年)以来の日本公開作。

文・水島七恵 写真・森本菜穂子

他者を通じて世界を発見するために、私は映画を撮り続けているのです。

— 監督にとって「多様性のある社会」とは？

それは日常的に関わなくてはいけない問題です。今はフランスをはじめとするヨーロッパも、またアメリカでもナショナリズムが台頭していると思います。みんな自国だけが大切といった、自分ファーストになっていると感じます。ここでも他者に対する恐怖心があるんですよ。例えば不思議なことに人種差別のある地域というのは、移民が少ない地域に多い傾向があるんですよ。知らないがゆえに「きっとこんなだろう」という思い込みが生まれ、差別が引き起こされていく。でも、そうやって想像をめぐらすよりも多様性のなかに飛び込んでみる。そこがはじまりではないでしょうか。だからあきらめてはいけません。関わらなければいけません。それを克服するレシビは、まだありませんから。



映画『人生、ただいま修行中』
©Archipel 35, France 3 Cinéma, Longride - 2018

3 / 奥村奈央子 OKUMURA Naoko

ソーシャルコーディネーター / デザイナー

デザイナー、プランナーとして活動しながらソーシャルファームや福祉施設を訪ね歩く。イタリアの〈ラボラトリオ・ザンザーラ〉に出会い、日本の窓口となる。現在、〈クラリスファーム〉や法務省矯正局と共に新たな取り組みが進行中。

文・井上英樹 写真・森本菜穂子

デザインには社会とのフックになる力がある。

奥村奈央子さんは、デザインを通して、人と社会とを繋げる取り組みをしている。きっかけのひとつは〈ラボラトリオ・ザンザーラ〉との出会いだ。ザンザーラとはデザイナーやソーシャルワーカーらが共同で設立したイタリア・トリノにあるNPO福祉法人。イタリアでは精神科病院が廃止されており、ザンザーラは精神や知的障害がある人たちの表現を通し、様々な隔たりを創造的に解決するために活動している。シルクスクリーン商品などを制作しているアトリエは街なかであり、住民は豊かな才能を持つ人たちと気軽に交流ができる。現在、奥村さんはザンザーラのアジア圏における輸入・販売元パートナーでもある。また、ソーシャルファーム(障害のある人など労働市場で不利な立場にある人々の就労の問題に取り組む企業)や法務省矯正局(少年院や刑務所を所管)などと共に活動・デザインの発信にも携わっている。

— なぜ、ソーシャルファームなどに興味を？

デザインには、問題解決やビジョンを広げている可能性が広がります。デザインは色や形など狭義にとらわれがちですが、もっと大きなビジョンやイメージを設計することができるものです。数年前、オリーブや野菜の栽培をしている〈クラリスファーム〉の埼玉福興株式会社代表の新井利昌さんと出会いました。ソーシャルファームは、どんな人も受

け入れる「なんでも来い!」の場所。農園では高齢の方や障害のある方などを受け入れています。……私自身、働きすぎてしんどくなったことがあるんです。社会には、病氣や障害がある人の行く場所はあるけれど、心が疲れた人が行く場所は少ない。農閑期や高齢で畑に出られない人が、デザインやアートとの協同作業でお金を稼ぐことができたらなと考えています。クラリスには様々な感性を持つ人がたくさんいる。デザインを手段として使い、もっと素敵に見えるようにしたいなと考えています。

— デザインの力をどう捉えていますか？

世の中の差別や偏見というのは、無関心や知らないことから発生し、恐れという感情に繋がっていく。私はデザインを社会に繋げるためのフックとして使っています。私たちのデザインは、絵を描く人、企画を考える人、デザインをする人、様々な人々と協働することでできていきます。誰が上とか下とかなくて、誰がいなくなってもできないチームみたいなものです。ソーシャルファームや少年院の中には、伝えたいことがたくさんあるんです。そのメッセージをデザインやシルクスクリーンにのせて社会に伝えていきたいですね。

— いま、矯正局とのコラボレーションも進んでいるそうですね。

法務教官募集リーフレットの企画・デザインをし

ました。そこではクラリスファームの皆さんと一緒に絵を描いて、デザインをしました。私はデザインには社会とのフックになる力があると思っているんです。ふと、手に取りたくなるような、知りたくなるようなきっかけとなってほしいと思っています。いかに社会と繋がっていくか、応援してもらえるようになっていけるか。デザインを通して情報の届け方を考えているところです。

— 奥村さんはどんな世の中が理想ですか？

多様性を排除しない社会ですね。目指す社会はルイ・アームストロングの歌う『What a wonderful world』のような世界になってほしいとは思いますが、今は実験の途中という感じ。楽しくできればそれでOKかな。私たちは、デザインという手法を使って、固定観念にとらわれないものや場所を作り出せたらいいなと思っています。



〈クラリスファーム〉の野菜袋にイラストが使用されていた。





今回の共演者

内山智昭
UCHIYAMA Chiaki (1959-2018)

1959年、長野県生まれ。粘土造形を始めたのは37歳の頃。重労働の仕事と渡り歩いた後、障害者支援施設で暮らすようになってからのこと。幼少の頃の病氣と投薬によって、知的障害と聴覚障害という重複障害があるが、手話を学ぶチャンスも、自己表現の手段も持てぬまま生きてきた。入所した施設で粘土造形の活動に出合った彼は、当初から独特の世界観を見せ、不安定な行動もしだいに収束。造形意欲は日ごとに増してゆき、5～6年間に約300点の作品を制作するも、施設に入ってから学んだ手話で、「私はここにいたくない。家に帰りたい」と伝え、夢中だった制作を止めて退所。その後、働きながら自宅暮らし、制作は全く行わなかったという。

vol. 02

アートは創作したって、
おもしろい。

イッセー尾形の
妄ソ—芸術鑑賞

縦横無尽な妄ソ—で、見ている人を独自の物語世界へ誘うイッセー尾形さんが、障害のある人たちのアート作品を鑑賞。自由に妄ソ—の翼を羽ばたかせました。そこからなにが生まれるか？アートはもっと自由に楽しんでいいのです。

文・岡田カーヤ 写真・平野太呂 ヘアメイク・久保マリ子 作品写真・木興恵三

イッセー尾形流
妄ソ—芸術鑑賞 術

作品に接したことで、次の作品が生まれて、
みんながオリジナルになっていくのが理想。

アートの出どころはいっぱいあって、芸術家だとか、日曜画家とか、もちろん障害のある人も、みんな作品というものをつくる。でも、僕が妄想をすることは、誰がつくったかを見て、作品だけを見る。そうするといろいろな物語ができて、作品から違う作品が生まれていくこともある。作品に接したことで、「新たなものをつくりたい」というのが、健康な作品の育ち方だと思えますね。

僕の理想は、この妄想を聞いて、小さなアニメーションに

なってもいいし、絵本をつくってもいいし、指人形をつくってもいいし、映画になってもいい。「オリジナルは誰？」ではなくて、みんながオリジナルになっていく。そうやって作品というのは、次々と生まれあっていくのが理想というかな。

小説でも、映画でも、おもしろい芸術ってそうだと思うのね。つくっている人の手が見えてくるのも愛おしい。さっきの像もそう。手触りを感じられる。そうやって、生身の人がかかわっているというのが、物語をひきおこす要素かもしれませんね。

イッセー尾形 / Issey OGATA
1952年、福岡生まれ。1971年演劇活動を始める。一人芝居の舞台をはじめ、映画、ドラマ、ラジオ、ナレーション、CMなど幅広く活動。高い評価を得ている。



「遠い国の人」 / W323×D199×H232mm / 陶土、釉薬 / 制作年不詳 / 日本財団所蔵

『月とアンビバレンス』

この作品を見たとき、真っ先に思い浮かんだのはゴーギャンですね。

普通の画家とは違う絵を描こうって、野心満々でタヒチに行ったのに、フランスへ戻ってきても、ゴーギャンの絵はまったく売れなかった。それでもあきらめず、もう一度タヒチに行くんです。最初に行ったときは観光化されたところにしか立ち入れなくて、自分の思っているタヒチじゃなかった不満もあった。だから2回目のときは、もっと奥地へと入っていった。ひとり森の中の家を借りて。

すると、何日か経ったある朝、家の前の切り株にひとつの像がおいてあった。タヒチの人がつくったに違いないこの像を前にして、ゴーギャンは自分の芸術性に関するメッセージだと受け取るんですね。

「おまえがつくっているものは、所詮、フランス流に勝手にアレンジした作品じゃないか」

「どうだ、おまえは、こういうものがつくれるのか」と、いうように。

それからゴーギャンは、これに似たタヒチ人の像を自分でつくりはじめるんです。でも、家の前に置いてあった像の域までには、どうしても達しないことは自分でわかるんですね。

そんなとき、もうひとつの像が現れるんだ。また違う雰囲気のもの。その像は、さらに複雑になっているとも思えるし、前のものよりも表情が少し和らんでいるとも思えるし、女性っぽい面も見えてくる。このふたつの像がゴーギャンを悩ませるんですね。

誰が、なんの意図をもって、家の前に置いていく

のか。それをつくった人は、ゴーギャンの前には、絶対に現れないんですよ。そうして悩みなが創作に没頭しているうちに、ゴーギャンはマラリアにかかって寝込んでしまうんです。

現地の病院のベッドで高熱にうなされてると、誰かしらが、自分のおでこに冷たいものを当てて冷やしてくれている。なんだ気持ちいいなあと、ぼーっとして目を開けると、その人はさっといなくなっちゃう。そして、またうつらうつらと眠りについて、誰かの気配がするのだけど、やっぱり気づくといなくなっちゃう。見えたのは、逃げていった戸口からのぞく足の裏だけ。そうして何日も寝込んでるとき、「最初の像はおまえ自身、よそ者であるゴーギャンの像。そしてふたつめのは、あなたを看護している私の像です」という声が、夢かうつつか、聞こえてくるんです。

けれども、ゴーギャンを看病してくれたその女の子は、彼が回復してもついに現れなかった。ただただ、像が残されただけ。

森の中の家に戻ったゴーギャンは、このふたつの像から受けた印象で、自分が思うタヒチの絵を描き続けたんです。そして無心に描いているうちに、「彼を受け入れていると同時に、拒否している」というアンビバレンスな印象をもったタヒチ人たちの絵が、いっぱいできあがったのね。

像をつくった娘さんは看病してくれたり、いろいろとゴーギャンを見守っていたりしてくれたのだけど、自己紹介もしないし、あなたの世話をしている

とも言わない。それがゴーギャンにとっては、受け入れているけど、拒否しているというように思えた。なんで、もっとこっちに来ないんだよという歯がゆい思いを受け取るんです。

でも、タヒチの人にとっては、拒否とか、受け入れるという考えも、別段あるわけじゃない。ただそれが、よそから来た人とのひとつの接触のしかたにすぎなかったの。タヒチの人から見たら、ひとつめの像がゴーギャン。舌を出したりしてよくわからない存在。そして、ふたつ目が像をつくった娘さん。彼女はずっとゴーギャンを見守っていて、こういうのをつくって見てもらう関係にはなりたいたければ、それ以上のことはなにも望まない。

この娘さんは見たままをつくただけで、それをゴーギャンはアンビバレンスと受け取り、「迎え入れているけど、拒否している関係」と名付けたんだね。

そのアンビバレンスを描いたことで、タヒチのもっているエッセンスが表れた絵がいっぱいできあがったの。

そのころには、ゴーギャンのなかでそれを商品にして売ってやろうという邪な心はひとつもなくなっていた。このことが、ゴーギャンがタヒチで感じたことをそのまま描いたきっかけとなった、という純粋芸術のお話でした。

ちなみに『月とアンビバレンス』というタイトルは、ゴーギャンをモデルにしたサマセット・モームの小説『月と六ペンス』から拝借しちゃいました。

ある日、目覚めると、
タヒチの奥地に借りた家の前に、像が置かれていた。
これを見たゴーギャンが感じたことは……。



DIVERSITY IN THE ARTS PAPER 編集後記

PAPER07号では「地域」を特集しました。今回訪れた場所は静岡県、大分県、長野県、茨城県です。しかし、昨年秋の台風19号の被害でいくつかの取材が延期になってしまいました。茨城県の〈袋田病院〉は、最寄り駅近くの橋が崩落してしまいました。スタッフや病院に通う患者さんの中にも被害を受けた方も多くいたと聞きました。そんな中、取材の対応をしてくださり、本当にありがとうございました。この場を借りて御礼を申し上げます。

スタッフの一人である現代美術家の上原耕生さんは、〈袋田病院〉や病院で行うアート活動を「囲炉裏」だとおっしゃいました。人を寄せ付ける煌びやかな光ではなく、地味ではあるけれど暖かい場所。その言葉を聞いて、言い得て妙だなと感じました。

かつての日本家屋には囲炉裏がありました。現在の住宅に比べ、日本家屋は寒いと言われます。ですが、日本家屋は大家族で暮らすことを想定していて、家に人がいない状態を想定していなかった。そのため、囲炉裏にはいつも火がありました。一見、火がないように見えても、火箸で灰の中を探ると炭が眠っており、風を当てると火が燃えます。そしてすぐに囲炉裏は暖かさを取り戻す。明るく、暖かい場所には人が集います。〈袋田病院〉だけではなく、今回訪れたどの場所も、暖かい場所でした。いつ訪れても人がいる。静かに座れる場所がある。それがどれほど多くの人の希望となっていることでしょうか。災害の後、季節も寒い時期だったからこそ、いっそう際立って感じたのかもしれない。

日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS は日本各地で表現活動を行う障害のある人たちのアート作品と、それを取り巻く文化を広く紹介しながら、新たなプラットフォームを生み出していくことを目的としています。このメディアで紹介させてもらっている作品は人を魅了します。ひとつひとつの作品もまた、「囲炉裏」のようです。作品はけっして大きな炎ではないけれど、じんわりと長い時間、心を温めてくれる。PAPER も囲炉裏のような暖かい場所になればと思います。

DIVERSITY IN THE ARTS PAPER
編集長 井上英樹

DIVERSITY IN THE
ARTS TODAY



発行：2020年3月10日
発行元：日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS
住所：東京都千代田区神田神保町1-6 神保町サンビルディング4F
電話番号：03-5577-6627
編集：井上英樹、岡田カーヤ (MONKEYWORKS)
アートディレクション&デザイン：TAKAIYAMA inc.
表紙：栗原勝之
校正：鷗来堂
印刷：朝日プリンテック
©2020 The Nippon Foundation DIVERSITY IN THE ARTS
All Right Reserved